

大阪交響楽団 (第182回)

「作曲家の肖像画シリーズⅡ」で、ドヴォルザーク。指揮は秋山和慶、ヴァイオリン独奏渡辺玲子。このヴァイオリン指揮者が、徹底的にこのオケを鍛えあげた意味は大きい。秋山の棒には、曖昧さがない。一字一句、明確な指示で描きあげる。オケは、必死で喰らいつき、見事に期待に応えた。ドヴォルザークとしては、や

やメリハリのつき過ぎの感もないではないが、ここまでやり切ると、達成感で気持ちがいい。その反面、《新世界》では、むしろピアノシロの表現に注文が大きく、とりわけ金管セクションで、委縮する現象もみられたが、結果的には、秋山の注文に答えていた。この面での表現に、もう少し余裕ができればいいことはない。一方、フォルティッシモで爆発する部分では、まさに若いオケのパワーが充分に発揮され、新

鮮なカラーを身につけ始めている。

この日のもうひとつの目玉は、渡辺の独奏（ヴァイオリン協奏曲）だった。アメリカをはじめ、国際的なステージで活躍している彼女の、自由奔放なドヴォルザークもまた、日本の楽壇に新鮮な刺激を与えるものである。ドヴォルザークといえは、とかくホームミュージック的な印象になりがちな誤りを正すコンサートとなった。1月24日・ザ・シンフォニーホール

●日下部吉彦